■ほまれちゃん売春ヤラレ

――み♥　見ないでっ♥♥　あっ♥♥♥　イクっ♥♥♥　トぶぅぅぅ……っっ♥♥♥

天才フィギュアスケーター、輝木ほまれ。
その才能から将来を期待された選手だったが……
ある日を境にジャンプ精度が劇的に低下し、怪我もあり引退してしまう。
ジャンプ失敗の理由は、メディアでは思春期の急成長だとされているが……
実際には、大勢に凝視――視姦されることに耐えられなくなったからだ。
ほまれは端正な容姿、艶めかしいコスチュームが災いし、有名になった途端に夥しい視姦に晒されてしまった。
その中には純粋な応援以外にも、邪な意思のものが多く含まれており……
思春期の彼女にとって雄の視線はあまりにも刺激的であり、視姦に発情する性癖が開花してしまう。
本番中にも関わらず視姦絶頂し、別の意味でトんでしまった彼女は、
リンクに戻ることができなくなってしまっていた……

――以降、彼女の生活はフィギュアではなく……

「んふっ！　んぶぢゅるぅっ！」
じゅぼっ♥　じゅぼぼぼぉっ♥
【い、いいよ、ほまれさんのフェラ最高っ！】

……売春に捧げられるようになった。

スター生活はもちろん、有名なこととトラウマのせいで一般的な生活が出来なくなってしまった彼女。
残された道は非行――春を売ることであった。
幸か不幸か、有名かつ美人であるため人気を博し、
今では性戯もスケート並みのテクニシャンとして、少年たちから精と金を貪っていた。

【ほまれさん、ボクも頼みたいんだけど……残念ながら最近、不感症気味でイケないんだよね。
相当なテクニシャンだから期待してるんだけど、もし勃たなかったらタダでも】
「じゅぶぶぶっ！　んぶっ！　じゅぶれろぉぉっ！」
【うっ、イクッ！】
ドビュルルルッ♥
「ずじゅるるっ！　んぐっ！　んっぐ……ふぅ。……何よ、イケてんじゃん」

精力に自信がある、逆に不感症である……そんな者たちも涼しい顔で次々と抜いていく。
そんな彼女に、ある少年が大金を手に『買い』の話を持ちかけてきた。

【ねぇ、ほまれさん？　これだけの額ならいいでしょ？】
「……そう言われてもね……こればっかりはカネの問題じゃないよ」

少年の要求は本番行為。
ほまれは基本的に本番を認めておらず、極稀の例外を除いて拒否しているのだが
少年は大金を理由にしつこく要求してきた。もちろん断るが、少年は条件も足してせがんでくる。

【じゃあさ、ほまれさんの奉仕で一回でもイッたらそれで終わり。
ほまれさんが降参するかイッちゃったら本番ってのはどう？】
「なにそれ。どんだけ必死なの？　ていうか、わたしがイクわけないじゃん」

奉仕で少年が射精した場合、挿入しなくてもいいという。
代金は少年が提案したもののままなので、もし少年を前戯で満足させれば相当な稼ぎになる。
そしてほまれは、この手の絶倫を何人も手玉に取ってきており、搾精には強い自信があった。
快楽への耐性も同様であり、そもそも奉仕中にイカされることなど有り得ない。

「あー……いいよ、枯れるまで抜けばいいのね？
わかったからカネとチンポ出して」

どうせ少年の思惑通りにはならないし、させない。
渋々に了承すると、少年が札束を渡した後にペニスを露出させ……

（ま、どーせすぐ終わるか。こういう奴らは決まって口だけ……）
「っっ？！」
（な……何コレ……デカい……だけじゃない♥　匂いも……熱さも♥
こ、こんなのあるの……？）
【あれ？　ビビッちゃった？　イカせる自信ないならキャンセルしてあげてもいいよ？】
「っ！　ビビッてなんてない……！　必死すぎて引いただけ……こ、こんなの……すぐ終わらせるから！」
（こんなの……見かけ倒しのはず……！　軽く扱いてやれば、どうせ即堕ちに決まってる……！）

過去に例のない大きさ、熱さ、思わず子宮が反応する匂い……
凄まじい精力を持つ絶倫巨根に、ほまれは目を奪われる。
だが少年に挑発され、すぐに覇気を取り戻す。
元アスリートの闘争心が刺激され、睨み返して淫技を開始。
反り返る巨根に手を伸ばし細長い指を巻き付ければ、灼けるような熱感が直に伝わってくる。

「……っ」
（ほ、ほんとに熱い……！　やたらデカいし、硬いし……
年下のとは思えない……♥　どうなってんの、コレ……っ♥）
しゅっ♥　しゅこっ♥
【あれ？　噂ほど良くないなぁ……一応お金払ったんだから、うっとりしてないでちゃんとヤッて欲しいな】
「う、うるさい！　うっとりなんか……いいから黙ってシコられてて！」
（こんなにスゴいなんて、聞いてない……♥

で、でも、これだけ硬くして興奮してるなら、すぐ出るはず……っ！）

無自覚に眼が蕩けており、指摘されて強気に睨み直す。
確かに少年の絶倫さは想定外で、つい惹き付けられてしまう。
だが硬くなっているということは相当な興奮状態であることも意味している。
ならばすぐ射精するだろうと、たかをくくっていたが……
少年の自信も偽りではないようで、すぐイッてしまう他の男たちと違い、興奮状態を保ったまま動じない。

ぐちゅっ♥　にぢゅぅっ♥
（我慢汁は、出てんのに……♥　そ、それにしても、我慢汁だけで、なんて濃さと匂いなの……♥
こいつが精液出したら……一体、どれだけ……♥）
「が、我慢してないで……とっととイキなよ……っ♥」
【え、こんなんじゃイケないよ。手を抜いてるのかと思ったけど……もしかしてそれが本気？】
「っ！　言ってくれんじゃん……！」

全力というわけではないが、決して手加減していたわけではない手淫。
性豪であろうと数分足らずで果てさせるはずだが、あっさりとした態度をされ、ほむらの闘争心が更に煽られる。

「なら……本気で搾ってあげる……！　覚悟するんだね……！」

手淫を止めて巨根を固定すると、ほまれは唇を開く。
絶倫を含められるだけ広げ……

（こんなの咥えたら、下手したらこっちが感じるかも……♥　でも、ヤるしかないっ♥）
じゅぼぉっ♥
「んぐっ♥　んぶぅぅっ♥」

勢いよく巨根にしゃぶりつき、口内で扱き立てる。
特技の一つであるフェラチオ。ほまれの口淫で射精しなかった男などおらず、ゆえに絶対の自信を持つのだが……
少年を責めるはずが、逆にほまれの方が強い興奮に襲われていた。

「んぶっ♥　んっ♥　んっふ♥　はぁっ……んんんぅっ♥」
じゅぼっ♥　じゅぷっ♥　じゅぶぶぅっ♥
（ヤバいっ♥　これ……ウソでしょ♥　美味し過ぎるっ♥　チンポが美味しいなんて、有り得ないのにっ♥
匂い……♥　熱さ……病み付きになっちゃう……っ♥♥）

口いっぱいに広がる雄の精力。それが本能を強く刺激し、今まで感じることのなかった快感を生みだしていた。
気味が悪いはずの肉幹の弾力と硬さ、愛液の匂いと味。
それが不思議と心地よく感じ、少年を果てさせるどころか夢中になって味と触感を貪ってしまう。

口内が無意識に淫技を使い、舌肉を絡ませてカリを刺激し、
吸い付く、あるいは揉むような動きで肉棒全体をねっとりと舐め回していく。

(チンポ……咥えるのが、気持ち良い……♥　こんなの、はじめて……♥　あ、有り得ないのに……っ♥)
　じゅぷっ♥　じゅぼ♥　じゅぶんっ♥　じゅるるるっ♥
「んはっ♥　あ♥　はんっ♥　んっ♥　んっ♥　んふぅっ♥　んちゅっ♥　んぢゅるぅ……っ♥」
【ははっ、すっかり夢中になってるね♪　このチンポ気に入っちゃった？】
「んふぁっ？！　こ、これは……そんなんじゃないから……♥
　あんたこそ、もう限界なんじゃないの？　とっととイキなよっ♥」
【う〜ん、イマイチだなぁ。もっと本気でヤッていいよ？】
「っ……！　ちょっとスタミナあるからって、調子に乗って……！　どうなっても知らないよ！」

つい熱が入ってしまった……とはいえ、性戯としての威力を緩めていたわけではない。
舌使いや吸淫などで巨根を先端から根元まで余さず刺激したはずだが、それすらも嘲笑われてしまう。
プライドを刺激されたほまれは気を引き締め直し、少年を黙らせるために更なる責めに切り替える。

【お、パイズリかぁ……ほまれさん、おっぱいスゴいもんね。これならイケるかな？】
「減らず口もそこまでだよ……お望み通り、一瞬でイカせてやる……っ！」

普段は目立たないものの、露出させた胸は見事な発育ぶり。
顔ほどもあるボリュームが豊かな曲線を描いて揺れ動き、男なら思わず見入ってしまう爆乳だ。
これで責めた少年たちは、いずれも数秒足らずで果てていった。
言わば必殺技であり、失敗すれば約束通り本番を許すことになってしまう。
ほまれは覚悟を決め、瞬殺するつもりで肉剛を挟む。

「いくよ……っ！」
　ずりゅっ♥　ぶるぅんっ♥
「っっ♥♥」
(やっぱり……♥♥　こいつの、ヤバい♥♥　谷間に収まりきらないし……♥♥
　こんなの……胸でも……感じちゃう……っっ♥♥)

どんな男でも果てさせる淫技。だがまたしても、ほまれの方が快感を得てしまっていた。
大きく実った爆乳はサイズの割に感度が良い。とはいえ比較的敏感、という程度なのだが……
既に発情していたために感度が増しており、巨根の熱感や硬さを過剰に感じ取ってしまうのだ。
直に押し付ければ乳淫の威力を貫通して精力が沁み込み、身体の芯にまで響いてくる。

【いいねー、なかなか気持ち良いよ♪　でも、ほまれさんの方が感じてない？　まさかパイズリで……】
「か♥♥　感じるわけないだろ、こんなのでっ♥♥　ほ、ほらっ♥♥　とっとと……イキなよっ……♥♥」
　ぎゅむっ♥　にぢゅっ♥　ぬぢゅ……ぶるぅんっ♥
「んっ♥♥　はっ♥♥　ぁ♥♥　このっ♥♥　何で……んんんっ♥♥」

（パイズリだけで♥♥　何でこんなに気持ち良いのっ♥♥　このままじゃ、こっちがおかしく……っ♥♥）

本気で責めているはずが、それでも少年は余裕を崩さない。
対し、ほまれは今までにない官能の昂ぶり具合に身体が時折ひくんっ♥　と跳ねてしまう。
想像以上の乳房での快感。また、口内にも肉悦の余韻が残っている。
フェラチオの愉悦で嗅覚と味覚が支配されていたのか、咥えていないのに未だに我慢汁の匂いと味が官能を責め続ける。
それに翻弄されて高揚が止まらず、逆に乳淫の威力は落ち、じわじわと劣勢となっていく。
淫技を出しているはずなのに、少年の言う通りほまれが絶頂する可能性も現実味を帯びてくる。

【あ……ところでさ、言い忘れてたんだけど……今この光景、撮影してるから】
「っっ？！　な♥♥　何を……っっ♥♥」

更に少年が追い打ちをかけるように携帯端末を見せる。
端末はある映像をライブ配信しており……その枠内には
肉剛に奉仕し、はしたなく乳首を勃起させて貌を蕩けさせている淫乱女……ほまれの姿があった。

（と……撮られてる♥♥　視られてるっっ♥♥　わたしのこんな姿♥♥　大勢に……っっ♥♥）

無断撮影など、当然ルール違反。
しかし勃起乳首を見られたほまれは、少年を注意・拒絶する余裕などなかった。
売女となり、既に克服したはずの視姦願望。
だが少年のあまりの精力にあてられて昂ぶった今のタイミングで撮影されていると知り、
再び視姦される欲求が湧き上がってきていたのだ。
リンク上だけでなく、落ちぶれた淫らな姿すら晒しものにされる。
その惨めさが被虐快感となり、肉悦反応として乳首がギンギンに屹立する。

（わたし♥♥　また♥♥　また男の子に♥♥　大勢に視られてるっ♥♥
ダメっ♥♥　そんなに視られたら――♥♥）
ずぷっ♥　むにゅんっ♥
「あ♥♥　あはぁぁ……っ♥♥」

大きな胸全体で視線と雄熱を感じ、あからさまな喘ぎを漏らしてしまう。

【はは、可愛い声出たね♪　もうイキそうなの？】
「っ♥♥　そんなわけないっ♥♥　調子に乗らないで……♥♥　こ、今度こそ終わらせてやる……っ♥♥」

言うと、ほまれは爆乳で巨根の根元を締め上げると、谷間からはみ出た亀頭部分に吸い付いた。

ぶるんっ♥　じゅぼぉぉっ♥　♥♥

「ずちゅっ♥♥　んぢゅるぅっ♥♥」
【おっ、パイフェラか……いいね、それならイケるかも！　ほらもっと激しく！】
がしっ♥　じゅぼっ♥　じゅぶぶぶっ♥
「んぐっ♥♥　んぶぅっ♥♥　ちょっ♥♥　押し付けな……はぶっ♥♥　んふんんっ♥♥」

少年の持つ巨根だからこそ可能なパイフェラ。
その責めで今度こそ少年を果てさせようとするが、少年は心地よさを感じつつもまだまだ余裕。
むしろより強い吸淫を求めてほまれの頭を押さえ付け、爆乳から喉奥までが巨根に犯されていく。
抵抗して舌を使い、口全体で嬲り抜くが、むしろ感じるのはほまれの方であり……

「んぼっ♥♥　っぐ♥♥　んじゅぶるぅっ♥♥」
（こいつっ♥♥　どこまで♥♥　いい加減にっ……）
【ははっ、スゴい顔♪　ドスケベすぎるよそれ、ほらみんなが見て盛り上がってる！】
「っっ♥♥」

再び大勢に視姦されていることを意識させられ、身体全体が熱くなる。
どんどん高まる視姦欲求。それが官能を満たし、乳首の膨張が限界にまで達する。
物欲しげに朱く尖る乳端。それを少年の指が不意に、力強く摘まみ上げ……

（視られ……♥♥　や、やっぱりダメ♥♥　視られたら♥♥　どうしても……っっ♥♥）